音韻隣接語の学習に意味カテゴリーの近接性が与える影響

LEE WEITUNG

言語は，音韻や文法，意味，語用論などを含む多層的で複雑なシステムで構成される。言語を構成するこれらの下位要素は，相互作用し合いながら発達する。乳幼児期の語彙発達はのちの言語スキルや学力を予測することが知られていることから，子どもの単語学習の発達メカニズムを明らかにすることは，理論的にも応用的にも重要な研究課題だといえる。

単語学習において，言語を構成する複数の下位要素が相互に絡み合う興味深い現象に「音韻隣接語」がある。音韻隣接語とは，2 つの単語を比べた場合，音素が 1 つのみ違う単語のことである。例えば，単語 beach と peach は互いに音韻隣接語の関係にある。このような音韻隣接語は，音韻が似ているために子どもにとって混同されやすく，学習が困難であるといわれてきた。

これに対して，Dautriche et al. (2015) は，音韻隣接語の学習が子どもにとって難しいのは音韻弁別それ自体ではなく，既知語とその音韻隣接語との文法カテゴリー（名詞や動詞など）の近接性が主要な要因であると指摘した。しかし，発達初期においては，名詞や動詞といった文法カテゴリーは，生物や行為といった意味カテゴリーと基本的には交絡している。そのため，音韻隣接語の学習に干渉する主要因が，文法と意味のどちらにあるのかはわからない。そこで，本研究では，特に名詞に焦点を当てて，音韻隣接語の学習に意味カテゴリーの近接性が与える影響を検討した。

日本語を母語とする 18-20 ヶ月児 34 名（実験 1）と 20-23 ヶ月 39 名（実験 2）を対象に実験を行った。各児は自身が既に知っている名詞と音韻的に隣接する 2 つの新奇語を学習した。参加児は，2 つの新奇語をそれぞれ意味カテゴリー近接条件と意味カテゴリー遠隔条件の各条件の元で教わった（参加者内要因）。意味カテゴリー近接条件では，既知の名詞と意味カテゴリーが類似する新奇語を教わり（例：「ネコ」の音韻隣接語「メコ」を新奇生物の名前として教える），意味カテゴリー遠隔条件では，既知の名詞と意味カテゴリーが異なる新奇語語を教わった（例：「クツ」の音韻隣接語「グツ」を新奇生物の名前として教える）。

18-20 ヶ月児を対象とした実験 1 の結果，意味カテゴリー近接・遠隔のどちらの条件においても，参加児は新奇音韻隣接語をうまく学習できなかった。しかし，探索的分析を行った結果，既知語への理解が高い場合には，意味カテゴリー遠隔条件では新奇音韻隣接語を学習できた一方で，意味カテゴリー近接条件では新奇音韻隣接語を学習できないという，意味カテゴリーの近接性による学習への干渉効果がみられた。そこで，既知語の知識がより確立される高月齢の 20-23 ヶ月児を対象に実験 2 を行った。

しかし，実験 2 でも，意味カテゴリーの近接性に関わらず，参加児は新奇音韻隣接語をうまく学習できなかった。さらに，仮説および実験 1 とは異なり，既知語への理解が低い場合に，意味カテゴリー遠隔条件において，新奇音韻隣接語の指示対象を誤って学習するという結果が得られた。これには，新奇オブジェクトの知覚的顕著性など，手続き上の問題によって結果が歪んだ可能性や，参加児の語彙発達の程度が未熟だった可能性などが考えられる。

以上の結果を踏まえ，今後は実験デザインを練り直すことに加えて，日本語圏における音韻隣接語の学習をさらに解明することが重要だと考える。例えば，意味カテゴリーではなく文法カテゴリーが音韻隣接語の学習に及ぼす影響を独立に調べたり，親子インタラクションを通して，音韻や意味・文法的に紛らわしい単語を，養育者がどのように子どもに教示するかを調べたりすることが挙げられる。これらの検討により，語彙発達の通言語性や，語彙システムの進化に対する理解が深まると期待される。（比較発達心理学）